



連載
語る
誌す
⑥

文◎山本純一
text by Yamamoto Junichi
撮影◎馳純
photo by Hase Jun

ご主人との散歩は実に半年ぶり。そのせいか鴻巣さんを見ては喜んで飛び上がるコーギー犬のアオ。

心が萎える時

「生きていてくれたら……。それだけでいいんですよ」
子どもを自殺で失った父親がTVで語る。絶望の底の底まで降りた人が身を捧げるように口にした言葉だ。人は苦しみや突然の悲しみを前にすると、糸を切られた操り人形のように、心がたつと萎えてしまつ。そんな時は、なにもかもがどうでもよくなり、投げやりな気持ちになるものだ。
「ああ、もう面倒くさい。このままひょいと日常生活

を投げ出したらどんなに楽だろうか」

そんな思いだけで死に向って歩いていく人が、現代では実に多い。人間の値打というものは「何ことを成し遂げたかではなく、生きていることにある」と説くのは宗教だが、「命」の尊さを心底分かり得る人は、死と直面した当事者だけなのかも知れない。
考えてみれば「生きることを安易に放棄する」のは人間だけだと思つのだが、命を支えるために頑張つて生き続けようとする実例は、自然界を見渡すと数多く見ることができ。

ここである生物学者がライ麦を使った面白い実験の

エピソードを紹介したい。三十センチ四方の深さ五十六センチの木箱に砂緒を入れ、そこに一本のライ麦の苗を植える。そして水をやりながら数カ月育てるのだが、貧弱でひよろひよろとしたライ麦は色艶もよくなく、実も少ししかついていない。

そのあと箱を壊し、そのライ麦の根の部分についている砂を振り落とし、どれほどの根が三十センチ四方の深さ五十六センチの木箱の中に張りめぐらされていたかを生物学者は計測したのだが（太い根から根毛と呼ばれるうぶ毛のようなものをつまみ測る）

その結果、一本の貧弱なライ麦の苗が数カ月間命を支

宇宙の中のたった一人の存在。

第一種第一級身体障がい者
◎WEBデザイナー
鴻巣新作

えていくために根の長さはなんと一万一千二百キロメートルにも達していたという。(ちなみに赤道を一周すると四万キロ)

生きるために、目に見えないところで、どれほどの大きな努力を支えられているか、自分の命がどれほどがんばって自分を支えているか。そのことを理解したら、実が少ないじゃないか、色艶もよくないじゃないかと、貧弱なライ麦を非難することはできないというのだ。

苦しみと絶望の果てに

「障がいは不便利です。だけど不幸ではありません。感動は求めません。参考にして欲しいだけです」

こんな帯が巻かれた書籍「五体不満足」の武広匡おとたけひろただ(著)を九年ぶりに読み返してみた。「健常者として生まれても、ふさぎ込んだ暗い人生を送る人もいる。そうかと思えば、手も足もないのに、ノーマルに生きている人間もいる。」

そんなあとがきを読み終えた私は「障がいを持つこととは不幸ではないんだ。ようは心の持ちようだ」と言い切る著者が、あまりにもあっけらかんとしていることに戸惑い、この本を読み終えた。

苦しみや絶望感の連続の底で、光を見るにはマイナスイ指向の極限まで降りていくことしか出発点はないとある人はいう。マイナス指向の極限とはどんな世界を言っているのか、そこで見る事ができる光はどんな光なのか、そしてその光はどこからやってくるのかを知りたくて、国府町にある身体障害者寮護施設の『飛驒つりす苑』を訪ねた。

ここには交通事故によって頸椎を損傷し、首から下が動かなくなった鴻巣新作さん(三十九才)が暮らしている。交通事故によって究極の生体環境に追い込まれた

彼は、今年寝たきり人生二〇年を迎えた。事故を起こしたのが十九歳だから、人生の丸半分より一つだけ寝たきり人生が増えたことになる。

今では「寝たきりのベテランですよ」と気軽に言えるようになった彼は携帯電話をかけ、TVのチャンネルやエアコンの操作、看護師への連絡、さらにはパソコンまでを使いこなし、なんと口にくわえた棒でキーを巧みに操り、ホームページの制作もする。今ではWEB SHIN(ウエブ・シン)という事務所まで立ち上げ、仕事をこなす。といっても事務所はベッドの上なのだが……。

その後、重度の障がいを背負った人でも経済面で自立ができる」ということを実証した鴻巣さんの生き方が話題を呼び、地元の学校から講演依頼が舞込んだ。「こんな俺だからこそ子どもたちに伝えられる事がある」と鴻巣さんは意気込み、こまめに講演会に出たが、子どもたちの好奇心溢れる視線に戸惑い、ぼくを無理して見なくてもいいんだと聞き直ったこともあった。また、ある時には児童から「こはんはどうするの? ウソコは?」とストレートに尋ねられ、障がいを隠そう隠そうとしている自分が恥ずかしくなり、ありのままの自分を受け入れるきつかけとなった。

しかし重度の障がいを持った人間がベッドを降り、ストレッチャーに寝たままで半身を起こし、壇上から話すのは体力的にも精神的にも厳しく、講演が恒例行事になりだしたことを機会に、暫く公の場に出ることを断っていた。そんな矢先の取材依頼、半ば断られることを覚悟したのだが、『解』の取材意図を理解してくれた鴻巣さんは、事故当時のことや現在にいたるまでの苦しみ、そして葛藤を包み隠さず告白してくれた。

命を支える、見える力



起きて半畳、寝て一畳。マットレス1枚のスペースが彼のフィールドワークだが、彼はここから世界へと繋がっている。

丹生川町の旗鉾は朴の木平スキー場が近いこともあり、民宿を営む家が何軒かある。鴻巣さんが小学生の頃、朴の木平スキー場は黄金期を迎えていた。当時は人工降雪機が今のようにならないうちに、一般化されておらず、良質な雪質と安定した積雪量を誇る朴の木平スキー場は、週末ともなると駐車場が満杯だった。それでもスキーヤーは国道沿いに駐車をし、板を担ぎスキー場までの長い距離を歩いた。土建をやり、猟師でもあった鴻巣さんの父はこの波に乗り遅れまいと意を決し、民宿をやりはじめた。

民宿は冬だけでなくGWや盆の時期も賑わい、素泊まり客もOKという気軽さが受け、お客は多かったという。家族と近所の人に民宿を任せ、父は冬場になると朴の木平スキー場で働いた。

リフト係の父のところへ弁当を持っていったついでにスキーをするようになった鴻巣さんは、中学生になると、夏は剣道、冬はスキーをするような体育系の毎日で明け暮れた。

やがて近所の青年たちが教えてくれた競技スキーで、鴻巣さんはアルペン競技の全国大会に出るようになった。(姉もスキー部で地元大会では幾度も優勝をしている)

元来の負けず嫌いも手伝ってか、タイムで勝負が決まる世界に没頭はしたものの、なかなか結果が出ず、スキーからは遠ざかるようになった。

「田舎では近所といえは年上ばかり。なぜかぼくは悪い人に可愛がられてね(笑)。煙草や酒を教えてもらい、さらには無免許でオートバイを乗り回してしました。当時は家の手伝いで畑仕事するのは当たり前で、軽トラックで肥しを運ぶのに免許なんかいるんかって感じて、無免許が違法という意識はなかったですよ」

その頃、スキー板は十数万円ほどしたが、工面して買っても嫌な練習が待っているだけで、その点オートバイ

巣さんも自動車学校へ通い、高校を卒業すると同時に自動車免許を取得した。しかし、この免許が鴻巣さんの人生を、奈落の底に突き落とすとは誰も知る由もなかった。

消えた記憶

免許を取得したあと、大半の若者は気もそぞろになる。こんな車を買った、あんな車を買いたいなどと、友人との話題は車一色に染まり、見栄も手伝ってか男の子は身分不相応の車が欲しくなる。負けず嫌いの鴻巣さんのこと、購入がスムーズに運んだとは考えにくい。尋ねると案の定、鴻巣家では車のことで一悶着が起きたよつだ。

「身分相応となれば軽自動車。実際のところ軽を買った友だちは沢山いましたよ。ぼくが欲しかったのはセドリックかソアラ。悪びれていたんでしょね。もちろん、オヤジは大反対ですよ。それで探めに探めて居間のガラスを割るわ、物はひっくり返すわ……。誰がって? ぼくですよ、ぼく。」

ならいつでも楽しめる。鴻巣さんはバイトで稼いだ十数万円で迷わずオートバイを買った。そのオートバイは自宅から離れた空家に隠し、親に内緒で乗り回していた。

ところが夜中、国道を走っていた鴻巣さんは父親とばったり路上で出会ってしまった。オートバイを購入

し、無免許で乗り回していた鴻巣さんを前にし、「自分で怪我をするのは構わんが、他人様に迷惑をかけたら只では済まんぞつ」と父は一喝したよつだ。

やがて斐太農林高校に入学した鴻巣さんは中学生以上に自由奔放な高校生活を送り、昭和六十二年に卒業したが、飛驒の高校生の大半がそうであるように、鴻

当時、姉は県外で働いていましたから仲裁役は母。母ではどうしようもなく、姉がわざわざ家まで出向き、休戦。諭されたばかりはオヤジの前で土下座をして許しを乞い、おぶくろが保証人になって、お金を工面することで、ようやく白のソアラを買ったことができたんです。これから働くという若者が一五〇万円もする

車を買っ訳ですから、反対されるのは当たり前なんですけどね……」

白のソアラを駆って片道三〇分、勤務先の国府町まで通う毎日が、四月からスタートした。そして四月二十四日の朝を迎えた。

この日、鴻巣さんは目覚めが悪く、いつもの時間より遅れて家を出た。車が鍾乳洞近くの直線道路を通過する。

「ああ、いつもなら町方を走っている頃なんだけだな」

焦るあまり、ハンドルを握る手にも力が入り、アクセルをいつもより深く踏み込む。前を走る車を一気に追い抜く。見るとスピードメーターは一〇〇キロを指していた。道は直線から下りに差し掛かりながら左にゆるくカーブをする。右は鍾乳洞の入口で、左手にガソリンスタンドがある。目を閉じていても光景が浮かぶほど通い慣れた道だ。

シガレットライターを煙草に近付けようとした瞬間、ガソリンスタンドに向って道を渡るつとする歩行者が一瞬視覚に入った。

時間は朝の七時四十五分。煙草をくわえた時、何気なく見た時計のことをなぜか今でも憶えているという。

その後の記憶はまったくない。

「眠ってはいけない！起きろ、起きろ」

凄厲な衝撃音を聞き付け集まってきた人たちが口々に叫ぶ。

「鴻巣さん、この新作や、早く連絡せんや」
母が現場に駆け付ける。(実際は、お父さんが事故にあった)と誤報が入り、お母さんはこの時間になぜお父さんが?と半信半疑で現場に向かったという)

た。リハビリに励む鴻巣さんを勇気づける言葉は空しく宙を舞い、苛立つ息子の気持ちを鎮めることができない母は、幾度も廊下に飛び出し、泣いた。

ところで鴻巣さんが事故で負ってしまった頸椎損傷というのは、頭いわるゆる頭蓋骨を支える首の部分の七つの背骨(頸椎)のどれかが傷つけられてしまったことをいう。どの骨が傷付けられたかで症状は変わるが、共通していることといえば下半身の麻痺。下半身の麻痺ということは、歩行に障害をきたすということ。日常生活には車椅子が不可欠となり、上半身の麻痺も伴ってくる。手の指、腕も動かせなくなる。さらに重度の障害となってくると全身が動かせなくなり、体温調整や排泄にも障害があったりと、さまざまな感覚に障害がでてくる。頸椎損傷には人生をも左右するほどの障害を生ずるのだ。

「単に大きな事故をやったんだな、という程度の認識しかこちらにはない訳ですよ。ぼくは歩いて帰るつもりでしたし、今年の夏は海に行こうなんて思っていましたから」
しかし、手には感覚がなく、首から下はまったくといっていいほど動かない。姉は弟の手を握り、何度もさすりながら、今はわからんけど、きつとよくなる」と呟いた。

一ヶ月が過ぎ、二ヶ月が過ぎ、三ヶ月が過ぎたが鴻巣さんの体は一向に良くなりません。「秋の高山祭り前には退院できるんですけど?」

鴻巣さんは担当医師に問いつめる。医師は困惑した表情を顔に浮かべ、「次ぎの高山



障がいを持っていても経済的に自立できることを証明した彼の部屋には液晶TVを始め、オーディオからDVDレコーダなどが並ぶ。



専用台の上にはエアコンのリモコン、電話、携帯電話、パソコン、TVのスイッチからチャンネル替え、さらに録画や再生もできるなどの情報機器が勢揃い。操作はすべて口にくわえたスティックで。

現場で目にしたのは車の前に立っている父の姿。その向こうにはこの春、息子が買ったばかりのソアラが見えた。車は見るも無惨だった。事故を目撃した知人の話によると、歩行者を回避するために咄嗟にハンドルを内側に切った車は、かなりのスピードで疾走したままガードレールの先端に突っ込み、大破したのだ。

搬送途中の救急車の中、鴻巣さんの耳に微かに届く救急隊員の声。見ると車窓の向こうに小八賀園の看板が霞んで見えたが、不思議と意識は芽え、前日に任意保険の用紙にハンコを押したことを思い出した。そして鴻巣さんはこのまま久美愛病院の救急治療室へと担ぎこまれた。

何も期待しない、何も期待できない

四日間、意識を失っていた鴻巣さんは看護師に抑えられながら、痛いんだよ、何とかしろよ、このヤロー」と叫び続けていたらしい。やがて病室に運ばれた鴻巣さんの意識はようやく回復した。

「息子さんの背中の中枢神経は、残念だが切れてしまっている」

担当医から思ってもみない過酷な現実を突き付けられたお母さんは、あのまましまつていつてくれたらどんなによかったか」と一瞬思ったという。さらに医師は、「現実を正直に伝え、息子さんにショックを与えるより、なんとか希望をもってもらうために嘘をつき続けましょう」とお母さんに提言した。

事故後の五ヶ月間は首を一切動かすことができず、天井ばかりを見続けていた鴻巣さんだったが、しだいに腕も少しだが動くようになっていった。祭りなら……」と消え入るような声で答える。そして翌年、春を迎え、鴻巣さんは同じ質問を浴びせる。質問の度にまたしても「次ぎの高山祭りなら……」と答える医師を見て、鴻巣さんは誰も信じれなくなってしまった。

ところがある日、病室のTVで、夏の二十四時間TVが流れていた。車椅子の花嫁」というドキュメントを何気なく見ていた鴻巣さんは次第にTV画面から、目が離せなくなった。

準ミス日本に選ばれた女性が婚約、幸せに満ち足りていた日々の中で突然、交通事故にあい入院。そして二ヶ月後に退院はしたものの、車椅子の生活を一生余儀なくされたのだ。それを知った鴻巣さんは未だ三ヶ月以上経っても退院すらできない自分の状況を、自ら認めなければならなくなった。

一人になると救いがたい愚かな自分、欲望や執着を断つことができなかった自分、人を幾多に渡って傷つけてきた自分を深く反省するものの、前途洋々としている若者に突き付けられた現実、どうみても地獄そのものだった。
「今となつては母ちゃんに対し、申し訳ない気持ちで一杯なんだけど、この頃は荒れていました。俺の体は動くんか、それとも動かんのか。動かんのなら殺せよ!」なんて喚き散らしていましたからね」

「母ちゃんですか?母ちゃんは、そんだけ言うんだつたらわりを殺して母ちゃんも死ぬ」なんて言っていましたね」

この日、修羅場状態に耐え切れなくなった母は病院を飛び出し、気が付くと旗鉾の家に向かって泣きながら丹生川街道をひたすら歩いていったという。そんなお母さんでも息子さんの前

思いは、一つ一つ積み重ねられた言葉によって。

あれから二十年 鴻巣新作 / 作

二十年の時が流れた。
あつという間でただただ早かった。
瞳をとじると色々なことが思い浮かぶ。
小さなこと大きなこと色々なことが……。
たくさん泣いたし、大声でも叫んだ。
逃れられない現実を受け入れられず、
病室のベッドの上で目を閉じて口も塞いだ。
でも辛かった。
見えてあたりまえ、聞こえてあたりまえ、
話せてあたりまえの機能を
自ら拒絶し続けることが辛かった。
やり場のない怒りから、
こつして逃げたかったのかも知れない。
しかし生きてることの意味を、
この拒絶した機能の目や口や耳が
私の心に変化を与えてくれた。
上手く説明することは出来ないが、
失った機能と残された機能が、
感謝することの意味を少しずつ教えてくれた。
そして私を支える家族と周囲の人々、
また記憶という形で、私の心に想い出をくれた人々が
教えてくれた。
感謝する気持ちと生きてることの意味。
苦しんだあの頃があつて、今の私がいる。
支えてくれる多くの人々がいたから、今の私がいる。
良いことにも、悪いことにも、すべてに感謝したい。
そしてこれからも、感謝する気持ちを忘れずに、
この人生の道を大切に歩き続けたい。
家族のために、支えてくれる多くの人々のために、
そして自分自身のために……。

では「代われるものなら私が……」という紋切り型の

台詞は一度も口にしなかった。

「あとになって笑うんですが、『普通、母親だったら、代われるものならあの子と代わりたい』なんて言うやろう。薄情な母親やな』なんて、あの子は冗談で言っていましたね。でも実際に代われるならいくらだって言いましたよ。他人様の冷たい目から逃れるために、車にあの子を乗せ、逃げようにも免許はない。とって背中に背負って逃げることもできない。この時、己の無力さをこれでもかって知らされましたね」

しかし、鴻巣さんの友人が家族に代わって一人、また一人と病室を訪れるようになると、沈黙していたやるせない空気が、笑い声に掻き消されていき、鴻巣さんの心は少しずつ開かれていった。

励みだけでは救われない

整形外科病棟に入院する患者はレベル1〜レベル5と分けられるが、4や5は軽度で食事や車椅子の上り降りなどが自分でできる人を指す。鴻巣さんはレベル1。たまたま高山へオートバイでツーリングに来て、事故を起こした人と同室になるのだが、同じ症状の患者たちに随分と励まされると鴻巣さんはいう。

ところで病棟にいる間はサボートの一切は病院側がやってくれるが、「生ここに居座るわけにはいかない。平成三年、治る見込みのない鴻巣さんは病院から「自宅で暮したらどうか」と言い渡された。しかし、自宅では介護設備もなく、母の力では鴻巣さんの介護はできない。鴻巣家は再びどうしようもない窮地へと陥った。

六月、事故から五年ぶりに丹生川の自宅に戻った鴻巣さんにあらたな生活が待っていた。ここは病院と異なりパソコンを使えるような装備もなく、仕事をす

ことは諦めざるを得なかった。

「体は不自由でも病院だったら風呂や洗髪などは設備がね、しっかりしているから。ところが自宅だったらそうはいかないんですよ。外国映画に出てくるような風呂に入るんですが、冬は寒くて。次第に体は拭くだけになってしまいましたね。それ以上に辛かったのは、家族が帰ってくるまで暗い部屋の中で一人でいなきやいけないこと。体が動かないから電球のスイッチが入れられないんですよ」

病院では想像もつかない生活が続いた。

「息子の体を治せるのなら他の病院でも」と僅かながらに希望を抱いていた父は、平成九年に風邪をこじらせ翌年の春、末期の癌と医師から伝えられた。

口論をし、時には掴み合いの喧嘩をしあった父。事故後も気丈な態度で息子と接し、家族の前でけつして弱音を見せることはなかったが、目の前にいる父にはかつての気丈さはなく、見えていて弱々しかった。

「何か欲しいものがないか」と鴻巣さんは病室で尋ねた。

「家の水が飲みたい」とか細い声でいう父。動くことができない鴻巣さんは咄嗟に「俺が汲んでくる!」と叫んでしまった。父のために最期だけでも役に立ちたいという悲痛な願いだった。その父も今はこの世にいない。

生まれ育ったわが家で、母との生活に慣れた頃、鴻巣さんのお母さんが手術のため、急遽入院せざるを得ないという問題が起きあがった。

「鴻巣さんの面倒を誰がみるのか?」

そんな時、民生委員の副委員長でもあった丹生川の原田さん(正宗寺の住職)が積極的に動き回り、丹生川役場の前向きな取組みのお陰で、現在の「うりす苑」へ試験的に入所することができた。平成十三年のことである。当時を振り返り、鴻巣さんについて原田さんは

こつ語る。

「わたしや、昔、身障者の中村久子さんと付き合いがあつて、新作君に出会った頃は彼を久子さんと重ねてやっていたな。」

新作君も久子さん同様、人間としてギリギリのところまで闘ってきたんだけど、そうした身障者に対して健常者はつい気を使ってしまうんやな。

彼の部屋に遊びにいき、『新作、これ食べるか?』なんて言うってしまったあと、『和尚、俺の体が動かんこと



傷付き、ぼろぼろになった円空仏を抱く原田住職。

を知っていて、それはないやろ』なんてことを彼が思ったか、思わないか。そんなことは、新作君の世界のことで、わたしには関係がないんやと。

そう思えるようになってから、彼を身障者だとは見なくなつたな」

さらに彼の家庭について和尚はこんな感想を述べた。「父親は猟師ということもあつて、性格は荒々しく、曲がったことが駄っ嫌いで、新作君とはかなり喧嘩もしたやろ。その分、母親は柔らかい存在で、父親の知らんところで新作君を支えてきたと思うんやな。両親の関係は剛と柔でいたってまとも。その中で、彼の豊かな感性は培われていったと思う。」

鋭い視点や研ぎ澄まされた感性は、もともと持っていたもので、この事故によってそれが芽を出したという感じがな」

身障者はもっと世の中に出ていくべきだと、さらに加えたが、彼の生体環境を考えると、現実を受身でいるしかない。しかし、そんな中で出会ったコンピューターは、彼の喜しを一変させ、ベットのいながらにして外の世界へと繋がった。さらに、習得したコンピューター技術によって、友人の多くは彼の恩恵を受け、コンピュータが使えるようになった。

「いや、驚くような集中力と理解力で、あれだけの内容をマスターしていったんだから、彼は凄いよ」

和尙も鴻巣さんと同じWEBデザイナー養成学校を受講したが、講座内容のあまりの難しさに、途中で投げ出したという。今では鴻巣さんから色々とアドバイスを受けながら、お寺のホームページをちよくちよくと更新している。

すべての人に、ありがとう、といたい。

ここで鴻巣さんがパソコンで自立できるようになったいきさつについて語りたい。

首から下が動かないという状態から少しでも改善するために整形外科の先生がリハビリを薦めたことが、現在の自立へと繋がった。リハビリといっても手首を伸ばす練習としてスティックを手首にくくりつけ、キーボードを打つのだ。ベッドにパソコンをセットできる装具を友人が考えてくれたお蔭で、鴻巣さんは上半身を起したままでパソコンが使えるようになった。その後、看護婦さんからワープロを借り、院内の誰からともなく、手術に必要な資料や研究発表のレジュメなどの制作依頼を受け、仕上げるのと謝礼をもらった。この時、こんな体になっても自分が人の役に立てるこ

ページには自作の詩が紹介されている(鴻巣さんは二人三脚で歩んできた母の喜ぶ顔がいつも見たいという。父に代わって実家のTVを買ひ替え、ストーブは給油の手を煩わせないFF式を買った。(業者が石油の入れ替えをしてくれる)もちろん、すべて鴻巣さんがパソコンで稼いだ金なのだが、鴻巣さんは経済観念もしっかりとしていて料金交渉がうまく、価格はしっかりとねぎったという(笑)。

最後にお母さんに今までの十九年間を振り返ってもらった。

「私はね、あの子にどれだけ救われたかわからんですよ。この事故によって、人間的にもひと回り、いや、それ以上に大きく成長した息子を見て、その凄さに驚くばかりやったね。事故は確かに不運なことやったけど、『この事故がなかったら』なんてことを考えても仕方がないことですよ。それよりもどん底の中であの子が見せてくれた光。これは私にとってはかけがえのない宝もんです」

「あの子と代わる(こ)ができたら...」とはけっして思わなかったお母さんだが、「もし、できるなら」と前置きをしてこんなことを口にした。

「わたしや、あの子より先にしまっていくわけにはいかんや。あの子より一分でも一秒でも長く生きたいんやさ。あの子には私が必要だし、私はあの子の母親やでな」

数回に渡ってのインタビュだったが、鴻巣さんは随所随所ではなくに気を遣ってくれた。暗い話になりがちな場面でも笑わせ、気が重い話は軽く話す。実際、彼が味わってきた苦悩は言葉で表現できるような生易しいものではないのだが、月日が経つに連れて苦悩は沈澱し、残った上澄みによって、彼は日に日に磨かれていってると感じるのだ。

鴻巣さんが大好きな尾崎豊。その中に『シェリー』と

とを知り、鴻巣さんは心底うれしかったという。

やがてスティックを手首から口に換え、キーボード操作を完全にマスターしはじめると、母がパソコンを買ってくれた。当時のソフトはDOSだったため、鴻巣さんは通信教育を受けながらベーシック言語を習い、書類の下書きから、おけそくの戒名書きなど何でもやった。福祉関係や郵政局などの公的機関は、障がい者の自立に協力的で営業はうまくいき、自分の小遣いは自分で稼げるようになった。

さらにホウレン草やトマトで有名な丹生川では、産地直販によるインターネットを使ったトマトビジネスを考える人が現れた。

「インターネットと一緒にトマトを売ってみるか」と声を掛けられたが、ホームページを制作できない鴻巣さんは申し入れを断念した。そしてWEBデザイナーの養成講座を受けると必死に勉強した。

こうして「物を売る」という仕組みを知った鴻巣さんは、販促企画やトマトを入れるケースのデザインなどにも興味を持ち、オークションでトマトを売りながら色々な勉強を重ねた。人一倍の負けん気と好奇心、さらには「障がい者でも自立ができるんだ」という強い信念が、ネットビジネスへのノウハウやホームページ制作技術の修得に拍車をかけた。数年前には高山市からパソコンサポートを業務として引受け、市を窓口にして、操作やトラブルについての電話相談も引受けた。ちなみに朝から夕方までインカムを付け、一日中携帯電話で喋り続けたという。

こんなアグレッシブな面を持つ鴻巣さんだが、片一方では情緒や情感を大切にしている。高松市でもあり、高校生の時によく口ずさんでいたとんねるずやおニヤンクラブ(秋元康/作詞)、そして尾崎豊の詩が好きで、言葉にも深く興味を持つ。

「先月、相田みつをさんの作品展があったでしょう。

この歌があるが、落ち込んだ時にはその詩を思い出し、自分を勇気づけてきたという。こんな詩だ。

シェリー ひとりで生きるなら
涙なんか見せちゃいけないよ
ね
転がり続ける俺の生きさまを
時には涙をこらえてささえてる
シェリー あわれみなど受けたくはない
俺は負け犬なんかじゃないから
俺は真実へと歩いて行く

シェリー 俺はうまく歌えているか

俺はうまく笑えているか

俺の笑顔は卑屈じゃないかい

俺は誤解されてはいないかい

俺はまだ馬鹿と呼ばれているか

俺はまだまだ恨まれているか

俺は愛される資格はあるか

俺は決してまちがっていないか

シェリー いったい俺は誰だ
シェリー いったい俺は誰だ

いまの生活の喜び

人はどん底まで落とされてはじめて、思いがけない小さな喜びや友情、そして見知らぬ人の善意、さらには奇蹟のような愛に出会うことがある。全身が動かなくても勇気が体に溢れ、希望や夢に世界が輝いてみえることがあるのなら、その一瞬を極楽と呼んでいいのではないだろうか。

「障がいを持つことは不幸ではないんだ。ようは心の持ちようだ」と武君が言ったように、宇宙は一つの色で塗りつぶされてはいない。そこには白と黒があり、

あの人の詩を読んでいると気持ちの深いところまで思いが滲み出てくるというか、くっつきますね」

鴻巣さんは事故を境にして、ことあることに自分の



内側を見つめるようになった。

「俺ってけっこうワルで親に散々迷惑をかけてきたから、その罰が当たったんやろなって……。悶々とする毎日が続いたけれど、次第に俺の命を支えてくれる人に対して、素直に、ありがとう、と思えるようになったかな。こういうことって回りには恥ずかしくて言えないでしょう、だからメールで」

彼は言葉に託し、詩に思いを込める。(彼のホーム

光と闇があり、善と悪があり、苦と楽があり、生と死があり、健康と病気があり、男と女があり、天と地がある。すべてが相対的なのだ。

それが宇宙の仕組みなのだ。素直に認めたとき、人間の存在はたとえ小さくても限りなく尊く思えてくる。

◎鴻巣新作のホームページ
<http://www.web-shin.com/>



撮影協力/高橋昭裕さん・上見晶子さんとその家族・鴻巣ユキさん

どん底の中で息子が見せてくれた光。
これはわたしにとって
かけがえのない宝ものですよ。

